

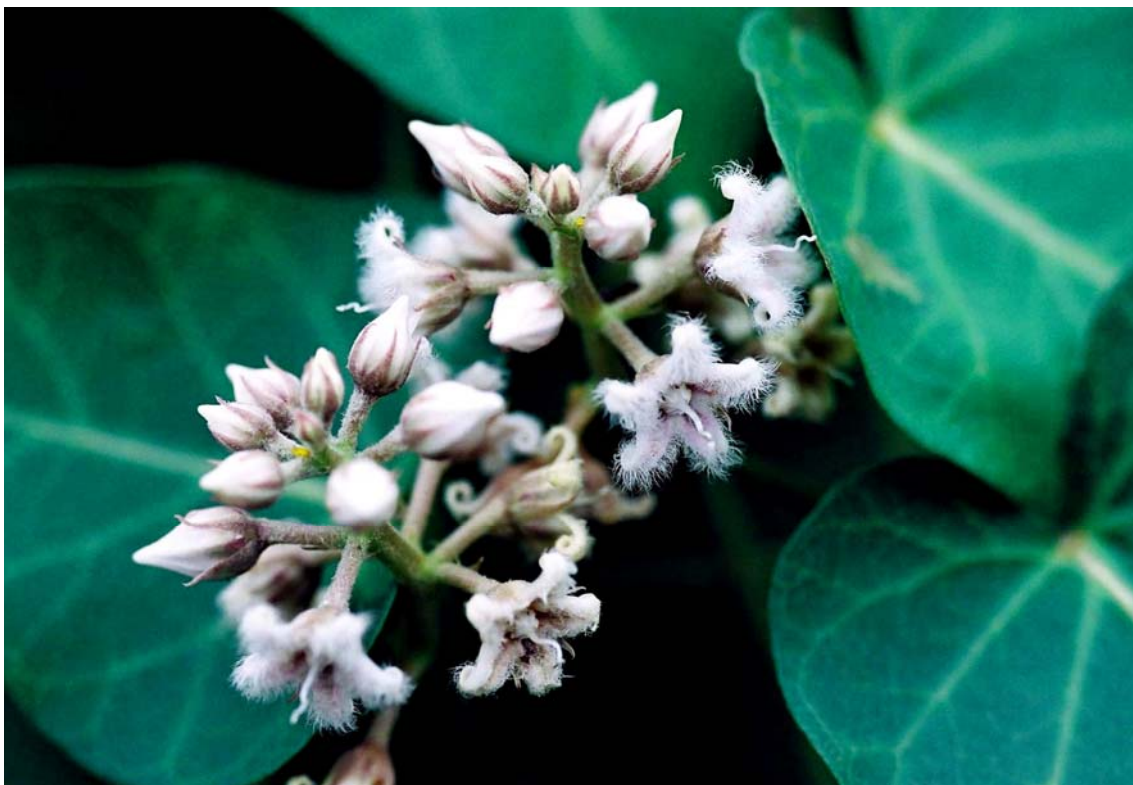
7) ガガイモ＝蘿摩＝芫

ガガイモはガガイモ科のツル性多年草で、日本各地の陽当たりの良い山野に極めて普通に自生する。心臓型の葉は対生し、長い柄がある。茎葉を傷つけると白い汁が出るが、これは解毒剤として用いられている。8月頃やや紫がかった径1cmほどの花を密集してつける。果実は広披針形で長さは8~10cmほどになり、種子には絹糸のような長い白糸があって、風に乗って遠くまで運ばれるようになっている。和名の由来はカガミイモを略したものという説、カガミは古名で、ゴマミ(胡麻実)の転じたものとする説など諸説がある。この他にもカガムクサの意味からとか、飯を盛る容器である「筥」の実という意味で、ケノミが転じたとする説などもある。別称としてもカガミクサ、カガミ、ジガイモ、ヤマイモなど、さまざまな呼び方がある。またアイヌ人は「チトイレプ」と呼んでおり、これは「ちぎれるもの」という意味で、根茎を指している。学名は『*Metaplexis japonica*』で、属名は「meta=共に」と「pleco=編む」との合成語で、中国では『蘿摩』(ラマ)である。

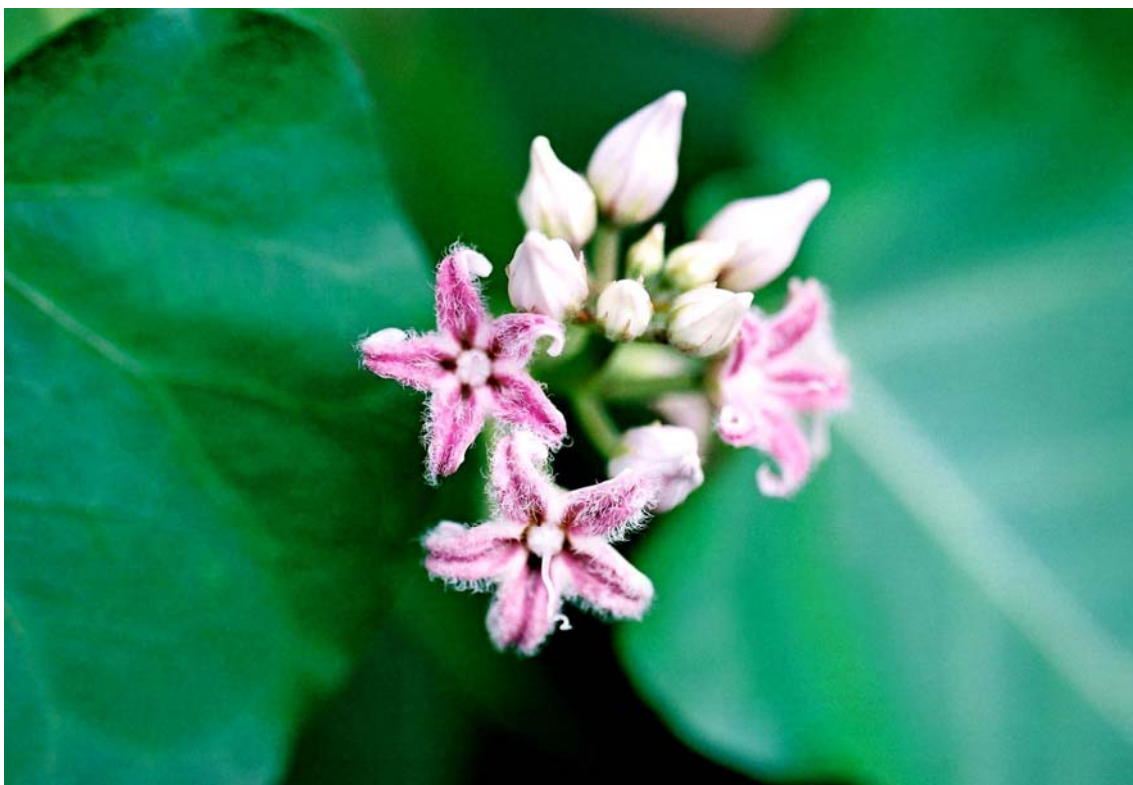
『大和本草』には「蘿摩 和名かがみくさ。又じがいも、ががいも、京都にてはちくさと云。葉茎をたてば乳汁の如くなる。白汁出るが故也。」と記されている。ガガイモが最初に現れる文献は『古事記』という説がある。大国主命の国造りの手伝いをした『少名毘古那神』(スクナヒコナノカミ)が、『蘿摩船』(カガミの船)に乗って海を渡って来たとする記述の、カガミノ船とはガガイモの果実を半分に割ったもので、この果皮を船の形に見立てたとする説である(03-04-08-11 タブ木の項を参照)。もともと古事記は『日本書紀』とは異なり、史実よりも物語性に重点を置いて記述しており、ガガイモを半分に割った形を船に見立てているのは、ユニークな発想で面白い。確かに江戸後期の1811年に刊行された『志都の岩屋講本』にも、「其の実を二つに破(り)ると、とんと船のやうな物でござる」と記されているのである。また『後拾遺和歌集』の詞書には「人の草合せしけるに、朝顔、かがみ草など合せけるに、かがみ草勝にければよめる」と記されており、その当時『草合せ』なる遊びがあって、勝った方が一句詠む習わしであった。この草合せは『花合せ』などと共に『物合せ』の一つで、もともとは中国で5月5日に行なわれていた『鬪草』を起源とするものである。いろいろな草を持ち寄って見せあい、その優劣を競った遊戯で、歌合せを伴うこともあった。

ガガイモの根茎はもちろん大事な食料だったが、若葉も食用になり、茎の皮は大変に丈夫で、撚り合わせて釣り糸や弓の弦などに利用された。種子に着いた毛は集めて綿の代用にしたり、針刺しや印肉などにも使われたため、かつては草パンヤと呼ばれたこともあった。漢方では種子を乾燥させたものを『蘿摩子』(ラマシ)と呼び、強精剤として用い、種子に着いた白毛は止血に、乳汁は解毒に用いられた。

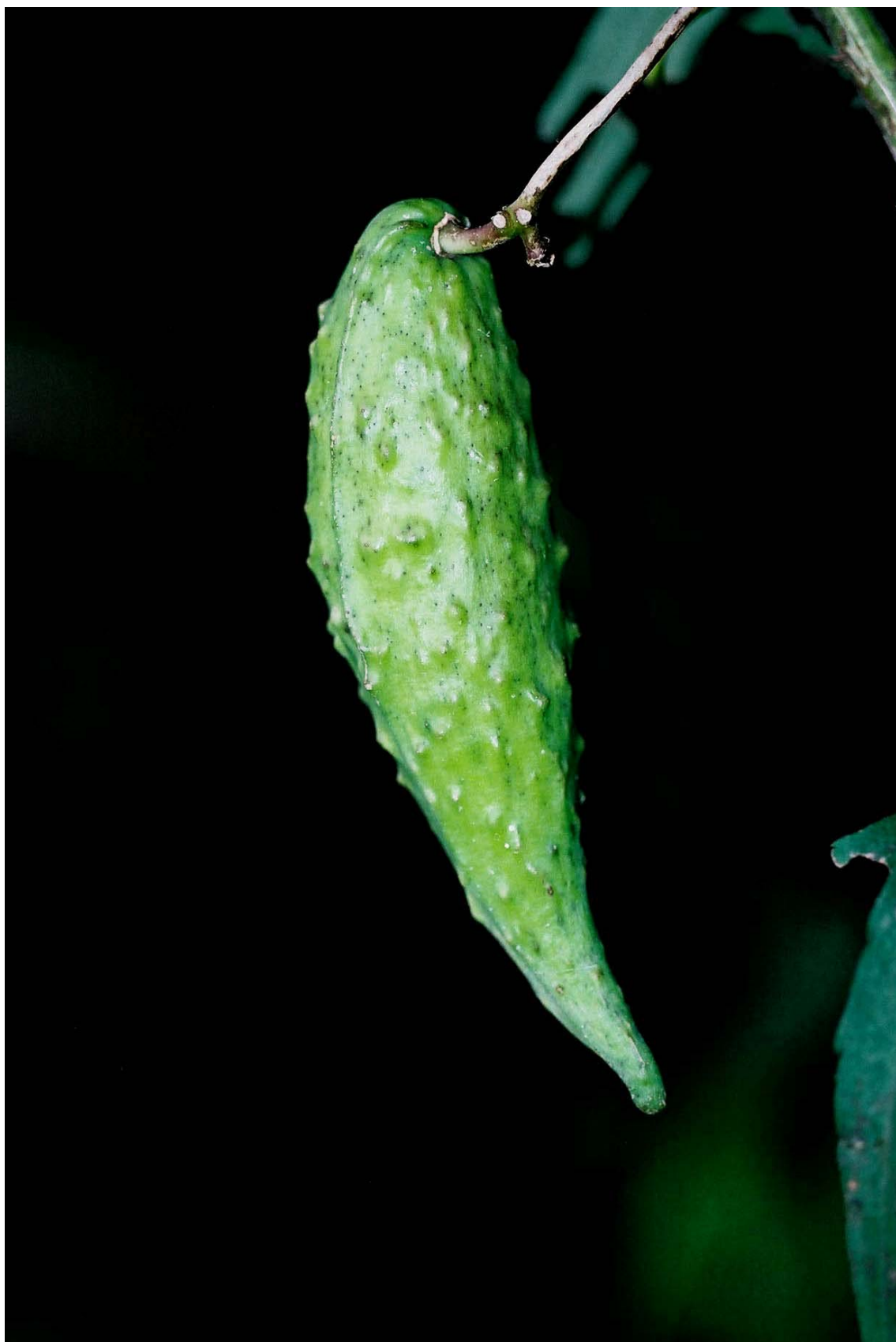
ジャガイモやサツマイモが現代のイモであるとするれば、このガガイモと後述するサトイモは日本人の原点的なイモということができようか。



ガガイモの花(埼玉県寄居町)。けして珍しいものではないが、この花や果実を知る人は少ない。もはや『古事記』の花はもとより、万葉の花も遠い遠い昔話なのだろう(埼玉県寄居町)。



赤みの強い花もあるが、花径はせいぜい 1.5cm 程度である(埼玉県寄居町)。



熟してくるとこんな形状になる二つにすれば船になるのかも…(埼玉県熊谷市)。



やがて果実がはじけて種子と絹糸状の繊維が出てくる(埼玉県熊谷市)。

[目次に戻る](#)